



LifeKeeper Single Server Protection

v9.3.1

テクニカルドキュメンテーション

2018年 11月

本書およびその内容は SIOS Technology Corp. (旧称 SteelEye® Technology, Inc.) の所有物であり、許可なき使用および複製は禁止されています。SIOS Technology Corp. は本書の内容に関していかなる保証も行いません。また、事前の通知なく本書を改訂し、本書に記載された製品に変更を加える権利を保有しています。SIOS Technology Corp. は、新しい技術、コンポーネント、およびソフトウェアが利用可能になるのに合わせて製品を改善することを方針としています。そのため、SIOS Technology Corp. は事前の通知なく仕様を変更する権利を保留します。

LifeKeeper、SteelEye、および SteelEye DataKeeper は SIOS Technology Corp. の登録商標です。

本書で使用されるその他のブランド名および製品名は、識別のみを目的として使用されており、各社の商標が含まれています。

出版物の品質を維持するために、弊社は本書の正確性、明瞭性、構成、および価値に関するお客様のご意見を歓迎いたします。

以下の宛先に電子メールを送信してください。

ip@us.sios.com

Copyright © 2018

By SIOS Technology Corp.

San Mateo, CA U.S.A.

All rights reserved

目次

はじめに	1
LifeKeeper Single Server Protection for Linux について	1
ドキュメンテーションとトレーニング	2
トレーニング	2
テクニカルサポート	2
VMware HA との連携	3
SteelEye 管理コンソール	3
インストールの概要	4
システム要件	4
セットアップの前提条件	5
セットアップの実行	5
ソフトウェアのインストール	5
ベースの vCenter と認証情報の設定	6
認証情報の考慮事項	6
SIOS LifeKeeper Single Server Protection vSphere Client プラグイン	6
プラグインの要件	7
vSphere Client プラグインの設定	7
vSphere Client プラグインの登録	7
vSphere Client プラグインの登録解除	7
vSphere Client ユーザーインターフェース	8
[LifeKeeper Single Server Protection] タブ	8
コンテキストメニュー	8
Datacenter Level	8
ESX or ESXi Level	9
Virtual Machine Level	9

Manage Plug-Ins	9
その他の表示	10
認証情報の設定	10
認証情報の追加または変更	10
ストア内の認証情報のリスト表示	11
サーバの認証情報の削除	11
追加情報	11
インストールの検証	11
トラブルシューティング	11
vSphere Client プラグインのセキュリティ警告 への対処	12
LifeKeeper API	12
ネットワーク設定	12
認証	13
SMC による API の使用	13
カスタム証明書の使用	13
証明書の使用方法	13
独自の証明書の使用	14
インストール	15
LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアのインストール	15
LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアのインストール	15
Chapter 2: インストール	17
セットアップの手順	17
インストール後の構成変更	18
修復インストール	18
対話画面の操作	18
認証の設定	20
リカバリキットの選択	21
インストール開始前の確認	22
setup スクリプトのオプション	23
Upgrade_LifeKeeper_Single_Server_Protection	25

SSP のアップグレード	25
リソースポリシー管理	27
概要	27
LifeKeeper SSP のリカバリ動作	27
ポリシーによるカスタム動作 およびメンテナンスモード動作	28
標準ポリシー	28
メタポリシー	28
リソースレベルのポリシーに関する重要な考慮事項	29
lkpolicy ツール	29
lkpolicy の使用方法の例	30
ローカルおよびリモートサーバとの認証	30
ポリシーのリスト表示	30
現在のポリシーの表示	30
ポリシーの設定	31
ポリシーの削除	31
LifeKeeper Single Server Protection のインストールの検証	31
管理	33
LifeKeeper Single Server Protection の管理の概要	33
VMware HA と LifeKeeper Single Server Protection の連携を有効にする	33
VMware HA を有効化した障害検出およびリカバリシナリオ	34
VMware HA と通知のみモード	34
LifeKeeper Single Server Protection ハートビートと VMware HA	36
LifeKeeper Single Server Protection で保護するシステムのメンテナンス	36
Quick Service Protection (QSP) Recovery Kit	36
LifeKeeper API for Monitoring	37
Watchdog	37
コンポーネント	37
設定	38
アンインストール	39
FAQ	41

SMC	41
質問	41
回答	41
トラブルシューティング	43
既知の問題と回避策	43
Core	43
GUI	44
Apache	45
Oracle	46
SAP	47
SMC のトラブルシューティング	47

はじめに

LifeKeeper Single Server Protection for Linux について

LifeKeeper Single Server Protection (SSP) は、単一ノード構成におけるアプリケーション監視を可能にします (つまり、クラスタの要件または制約はありません)。単一ノード環境は、物理的なものでも仮想 (vSphere、KVM) でも構いません。LifeKeeper SSP は、実績がある安定した SIOS LifeKeeper アーキテクチャ上に構築されます。LifeKeeper SSP は優れたアプリケーション監視機能を提供し、障害が発生したアプリケーションおよびシステムインフラストラクチャ項目 (例: NFS 共有、IP アドレス、ファイルシステム) のリカバリを実行することができます。何らかの理由でアプリケーションをリカバリできない場合、LifeKeeper SSP は、システムのリポートまたは VM とアプリケーション監視を設定された VMware 仮想マシンの VMware HA 再起動によって、ノードの再起動を開始します。

注記: LifeKeeper SSP は SIOS LifeKeeper 技術を使用して構築されているため、ドキュメント全体で LifeKeeper を参照します。また、両製品に共通するトピックについては SIOS Protection Suite for Linux ドキュメンテーションの情報を参照します。これらの共通のトピックを参照する場合、LifeKeeper SSP には以下の話題は適用されません。

- クラスタリング
- コミュニケーションパス
- 共有ストレージ (要件、構成、...)
- リソース階層の拡張/拡張解除
- ストレージキット (DR、DMMP、HDLM、LVM、MD、PPATH、NEC SPS)

注記: LifeKeeper SSP にベースとなるストレージキットがない場合、保護されるファイルシステムのマウントに必要なデバイスがシステム起動時にアクティベートされるようにするための手順が必要です (例: ファイルシステムが論理ボリューム上でマウントされる場合、LifeKeeper SSP が起動する前にボリュームがアクティブな状態になっていなければなりません)。

- リソース/マシンのフェイルオーバー (LifeKeeper SSP のデフォルトでは、これによってノードが再起動されます)
- リソースのスイッチオーバー
- 切り替え可能な IP アドレス (LifeKeeper SSP では、保護されるアプリケーションの一部には切り替え可能な IP アドレスが必要ですが、単一ノードしかないため、実際には切り替えは行われません)

LifeKeeper SSP のベースになっている SIOS LifeKeeper 製品の詳細については、共通するリリース番号の [SIOS Protection Suite for Linux ドキュメンテーション](#) を参照してください。このドキュメンテーションは、リソース階層の作成、リソースタイプ、状態と関係、グラフィカルユーザインターフェース (GUI)、および共通の作業と高度な作業に関する詳細情報を提供します。

ドキュメンテーションとトレーニング

SIOS LifeKeeper Single Server Protection for Linux のインストール、設定、管理、およびトラブルシューティングの方法を説明する関連ドキュメントは、[SIOS Technology Corp. ウェブサイトのドキュメンテーション](#) セクションから参照できます。SIOS LifeKeeper Single Server Protection for Linux のあらゆる側面について、以下のセクションで説明しています。

セクション	説明
はじめに および インストール	LifeKeeper Single Server Protection 環境のプランニングと設定、LifeKeeper Single Server Protection のインストールとライセンス、LifeKeeper のグラフィカルユーザインターフェース (GUI) の設定に役立つ情報を提供します。
管理	サーバのプロパティの編集やリソースの作成などのサーバレベルの作業、およびリソースの編集、拡張、削除などのリソースレベルの作業について説明します。
ユーザガイド	LifeKeeper GUI で実行できる多数の作業を含めて、LifeKeeper の GUI に関する詳細情報があります。
トラブルシューティング	既知の問題と制限について説明し、SIOS LifeKeeper Single Server Protection for Linux のインストール、設定、および使用を行うときに発生する可能性がある問題に対する解決策を説明します。
Recovery Kit	LifeKeeper Single Server Protection で特定のアプリケーションを管理および制御するために必要なオプションの Recovery Kit のプランニングおよびインストール手順、管理、設定、およびユーザ情報が含まれます。

トレーニング

LifeKeeper Single Server Protection のトレーニングは、SIOS Technology Corp. または代理店から受講可能です。詳細については、営業担当者にお問い合わせください。

テクニカルサポート

SIOS Technology Corp. と有効なサポート契約を結んだお客様は、新しい [SIOS Technology Corp. のセルフサービスサポートポータル](#) にアクセスできます。

[SIOS Technology Corp. のセルフサービスサポートポータル](#) では、以下のことができます。

- 弊社のソリューションナレッジベースから、問題の解決策と質問に対する回答を検索する。
- 次のメニューを選択して、年中無休の SIOS Technology Corp. のサポートチームにアクセスする。
- **Log a Case** - 新しいインシデントを報告する。
- **View Cases** - お客様の未解決と解決済みのインシデントをすべて表示する。
- **Review Top Solutions** - 弊社のお客様が表示した、最も一般的な問題の解決策の情報を表示する。

セルフサービスポータルを設定してアカウントを有効にする方法については、SIOS Technology Corp. のサポート (support@us.sios.com) にお問い合わせください。

また、SIOS Technology Corp. のサポートには、以下の方法でも連絡できます。

1-877-457-5113 (通話料無料)

1-803-808-4270 (米国以外のお客様)

電子メール: support@us.sios.com

VMware HA との連携

「はじめに」セクションで説明したように、LifeKeeper Single Server Protection は、物理環境と仮想環境の両方で使用できるように設計されています。LifeKeeper SSP を VMware VM にインストールした場合、VMware の HA 機能を LifeKeeper SSP と組み合わせて、保護対象リソースやノードの障害を監視し、復旧することができます。これらの機能を有効にする方法については、[VMware HA と LifeKeeper Single Server Protection の関係の有効化](#)を参照してください。さらに、LifeKeeper SSP には、VMware vCenter と連携する管理インターフェースを提供するオプションのコンポーネントが用意されています ([SteelEye 管理コンソール](#)を参照)。

SteelEye 管理コンソール

SteelEye 管理コンソール (SMC) は、VMware HA の構成で LifeKeeper Single Server Protection を実行するときに使用するオプションのコンポーネントです。SMC は、VMware vCenter と連携する管理インターフェースを提供する専用システムです。

VMware vCenter Server、および SIOS LifeKeeper Single Server Protection と関係して使用するときの SteelEye 管理コンソールの設定、インストール、および動作については、以下のトピックが役立ちます。詳細は以下のカテゴリに分かれています。

[インストールの概要](#)

[システム要件](#)

[セットアップの実行](#)

[vSphere Client プラグイン](#)

[vSphere Client プラグインの設定](#)

[vSphere Client ユーザインターフェース](#)

[認証情報の設定](#)

[インストールの検証](#)

[vSphere Client プラグインへの対処](#)

[LifeKeeper Single Server Protection API](#)

[カスタム証明書の使用](#)

インストールの概要

SteelEye 管理コンソール(SMC)のインストールは、いくつかの重要な手順で構成されます。

1. SMC のホストサーバ(仮想または物理)を指定する必要があります。サーバは **SMC を実行するための専用システム**である必要があります。SIOS Technology Corp. は現在、他の目的に使用中のサーバにおける SMC の実行をサポートしていません。小型の仮想マシンで十分であるため、このサーバが非常に強力である必要はありません。サーバの要件の詳細については、[システム要件](#)を参照してください。
2. SMC ソフトウェアは、`setup` スクリプトを CD メディアまたは `.img` ファイルから実行して、インストールする必要があります。このプロセスはシステムに必要な変更を行い、SMC ソフトウェアコンポーネントをインストールして、SMC サービスを開始します。
3. VMware vSphere Client プラグインを vCenter サーバに登録する必要があります。**注記:** SMC は、1つの vCenter インスタンスのみと関係できます。このため、複数の vCenter インスタンスを展開する場合は、SMC ソフトウェアを個々の vCenter インスタンスにインストールする必要があります。
4. SMC には、vSphere Client が管理する個々の SIOS LifeKeeper Single Server Protection (または SMC 経由で管理されるサブセット)との通信に必要な認証情報を設定する必要があります。認証情報の特定のセットが、複数の LifeKeeper Single Server Protection システムに有効である場合、これらの認証情報を1回で入力することができ、残りの LifeKeeper Single Server Protection ノードを個別に追加する必要があります。詳細については、[認証情報の設定](#)を参照してください。

システム要件

SteelEye 管理コンソール(SMC)は専用サーバにインストールする必要があります。これは物理サーバでも仮想サーバでもかまいませんが、他の目的に使用することはできません。SIOS Technology Corp. は現在、他の目的に使用中のサーバにおける SMC ソフトウェアの実行をサポートしていません。このサーバは、以下の最小要件を満たす必要があります。

- Red Hat Enterprise Linux/CentOS 6.4 x86_64 を実行可能な Intel (または AMD) の 64 ビットシステムであること。ベアメタルシステムと仮想マシンのいずれでもかまいません。
- 512 MB 以上の RAM を装備していること。
- ディスク容量が 8 GB 以上であり、`/opt` ファイルシステムに 1 GB 以上が使用可能であること。
- ネットワークアダプタが 1 つ以上あること。
- TCP/IP 経由で、VMware vCenter Server (vSphere Client プラグインを使用する場合)、および SMC が表示 / 管理する LifeKeeper Single Server Protection サーバと直接通信可能であること。SMC のホストサーバを選択するときには、ネットワークセグメント / ルート / ファイアウォールの考慮事項がある場合もあります。
- OS に同梱されている `openssl-devel` がインストールされていること。

セットアップの前提条件

システムを選択した後、SMC をインストールする前に以下の前提条件を設定する必要があります。

- デフォルトのベースソフトウェアパッケージを使用してシステムをインストールする必要があります。特別なパッケージを選択する必要はありません。
- システムのコアオペレーティングシステムの **yum** リポジトリを有効にし、使用可能にする必要があります。これは、ベースシステムのインストールメディアリポジトリ、またはネットワークリポジトリを `/etc/yum.repos.d/` で有効にする必要があるということです。

サポートするオペレーティングシステムがシステム上で動作を開始した後、[セットアップの実行](#)の手順に従って、SMC ソフトウェアコンポーネントをインストールできます。

セットアップの実行

SteelEye 管理コンソールソフトウェアのコンポーネントは、CD/DVD、または CD イメージを持つ ISO img ファイルからインストールできます。この時点以降、すべてのソフトウェアの手順は `root` ユーザとして実行する必要があります。

いずれの場合でも、CD または ISO img ファイルをマウントする必要があります。CD は通常の方法でマウントできます。img ファイルは、以下のようなコマンドを使用して、ループバックデバイス経由でマウントできます。

```
mount -o loop <path-to>/smc.img /mnt
```

(/mnt は、イメージのマウントに適する任意の場所にするのが可能)

ソフトウェアのインストール

イメージをマウントした後、以下のコマンドでインストールを開始できます。

```
cd /mnt; ./setup
```

セットアップツールがインストールプロセスをガイドし、以下の動作を実行してソフトウェアコンポーネントをセットアップします。

- SMC コンポーネントと競合するパッケージがシステム上に存在しないように、システムパッケージのアップグレードまたはアンインストールが実行されます。このプロセスには、事前インストールされた Web サーバ、およびそれに依存するコンポーネントのアンインストールも含まれます。このプロセスには、数分かかることがあります。
- 次に、すべての SMC ソフトウェアコンポーネント用として、セットアップツールにより、SIOS パッケージのインストール/アップグレードが実行されます。これも数分かかることがあり、システムに必要なその他の変更、特にクライアントと SMC との通信を可能にする iptables ファイアウォール設定の変更が含まれます。HTTP トラフィックが SMC サーバのポート 80 および 443 を通過するように、iptables 設定が変更されます。
- 最後にセットアップツールにより、必要な VMware SDK パッケージがインストールされます。インストールするには、VMware SDK のエンドユーザーライセンスに同意する必要があります。SDK のイン

ストールで、ツールのバイナリファイルのインストール先となるファイルパスを入力するように要求されます。これらのファイルについて、デフォルトの場所をそのまま使用することを推奨します。

ベースの vCenter と認証情報の設定

ソフトウェアコンポーネントのインストール後、セットアップツールは vSphere Client プラグイン、および SIOS LifeKeeper Single Server Protection ノードの通信に使用するデフォルトの認証情報を設定します。セットアッププロセスを完了するために、以下の動作が実行されます。

- セットアップツールにより、vCenter サーバ名、ユーザ、およびパスワードの入力が要求されます。この情報は、この SMC サーバが提供する vSphere Client プラグインを、指定した vCenter に登録するために使用されます。この手順の後、vCenter サーバはプラグイン用の追加のタブを表示します。最初のインストールの後にはいつでも、プラグインの再登録または登録解除ができます。そのプロセスの詳細については、[vSphere Client プラグインの設定](#) ページを参照してください。
- 最後に、セットアップツールは SIOS LifeKeeper Single Server Protection ノードとの通信に使用するデフォルトの認証情報の入力を要求します。これらの認証情報は SMC サーバに格納され、特定サーバに固有の認証情報が設定されていない限り、LifeKeeper Single Server Protection サーバとの通信に使用されます。SMC から LifeKeeper Single Server Protection システムをフルに管理できるようにするには、デフォルトの認証情報には LifeKeeper Single Server Protection ノードへの管理者のアクセス権限が必要です (代表的なインストールでは、ユーザがローカルの `/etc/group` ファイルの `lkadmin` グループに属する必要がある)。通常、デフォルトの認証情報は、インストールした LKSSP ノードの `root` ユーザとパスワードです。注記: パスワードのストレージは base64 でエンコードされていますが、LifeKeeper の credstore データベースでは暗号化されません。lkadmin グループのメンバシップを持つ別の LKSSP システムアカウントを使用することを推奨します。[認証情報の設定](#) ページには、SMC で使用される認証情報を管理する方法の詳細が記載されています。

これで、セットアッププロセスが完了します。ソフトウェアのインストールと設定が正しく実行されたことを検証する方法の詳細については、[インストールの検証](#) ページを参照してください。

認証情報の考慮事項

前述のセットアッププロセスの最後の手順では、LifeKeeper Single Server Protection システムにアクセスするためのデフォルトの認証情報を格納しています。この場合のデフォルトの認証情報とは、システムに固有の認証情報が設定されていないときに、LifeKeeper Single Server Protection システムでの認証に使用される認証情報を指します。SMC は常に、デフォルトの認証情報を使用するように戻ります。

このため、SMC の設定を簡略にするために、可能な限りすべての LifeKeeper Single Server Protection システムで同じ認証情報を使用することを推奨します。これは通常、LifeKeeper Single Server Protection システムの `root` ユーザを使用することを意味しますが、lkadmin グループに属するユーザである限り、すべてのシステムで共通な任意のユーザを使用できます。

SIOS LifeKeeper Single Server Protection vSphere Client プラグイン

SIOS LifeKeeper Single Server Protection vSphere Client プラグインは VMware vSphere クライアントと連携し、保護対象の仮想マシンのアプリケーション監視ステータスを提供します。プラグインを動作可能にするには、vCenter Server で登録する必要があります。

プラグインは、すべての転送動作にセキュリティで保護された HTTPS 通信を使用します。はじめてプラグインを vSphere クライアントにロードするときに **LK4Linux Valid SMC** の SSL 証明書のセキュリティ警告を受信しますが、これは正常な動作です。SSL 証明書を検査してローカル証明書ストアにインストールした後、セキュリティ警告を安全に無視できます。

プラグインの要件

- VMware vSphere バージョン 4 またはバージョン 5
- VMware vSphere Client
- クライアントシステムで Javascript とクッキーが有効であること

詳細については、[vSphere Client プラグインの設定](#)、および[vSphere Client プラグインのセキュリティ警告への対処](#)のトピックを参照してください。

vSphere Client プラグインの設定

インストール後にいつでも、vSphere Client プラグインの再登録、または認証情報の変更ができます。これは、必要に応じて別の vCenter サーバにプラグインを登録する操作も含みます。プラグインを別の vCenter サーバにインストールする場合、まず現在のサーバから登録解除する必要があります。

vSphere Client プラグインの登録

プラグインの登録は、`/opt/LifeKeeper/bin/registerPlugin.pl` ツールで行います。このツールは、vCenter サーバ、ユーザ名、およびパスワードの 3 つの引数をとります。vSphere Client プラグインを再登録するには、これらすべてが必須です。このツールの実行例は、以下のようになります (すべてを 1 行に記述)。

```
/opt/LifeKeeper/bin/registerPlugin.pl --server=myvcenter.mydomain.com --username=vcuser  
--password=vcpassword
```

注記: shell の解釈を回避するために、shell 文字でもあるパスワード文字はエスケープする必要があります。

vSphere Client プラグインの登録解除

SMC サーバからインストールしたプラグインは、以下のコマンドを使用してリストできます。

```
/opt/LifeKeeper/bin/registerPlugin.pl --action=list
```

プラグインを削除するには、以下のコマンドを実行できます (すべてを 1 行に記述)。

```
/opt/LifeKeeper/bin/registerPlugin.pl --action=remove --key=com.sios.us.lkssp
```

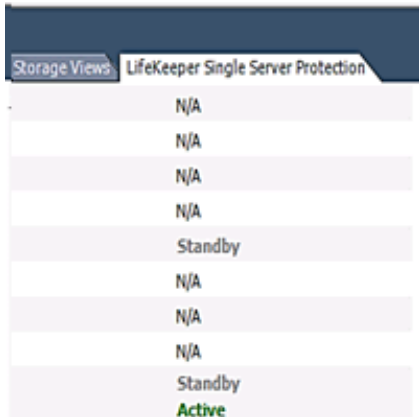
注記: プラグインの登録解除に使用するキーは、list 動作で表示されるものと同じにする必要があります。

注記: セキュリティ警告の詳細については、[vSphere Client プラグインのセキュリティ警告への対処](#)を参照してください。

vSphere Client ユーザーインターフェース

[LifeKeeper Single Server Protection] タブ

vSphere Client プラグインを登録すると、vSphere Client ユーザーインターフェースに [LifeKeeper Single Server Protection] タブが表示されます。

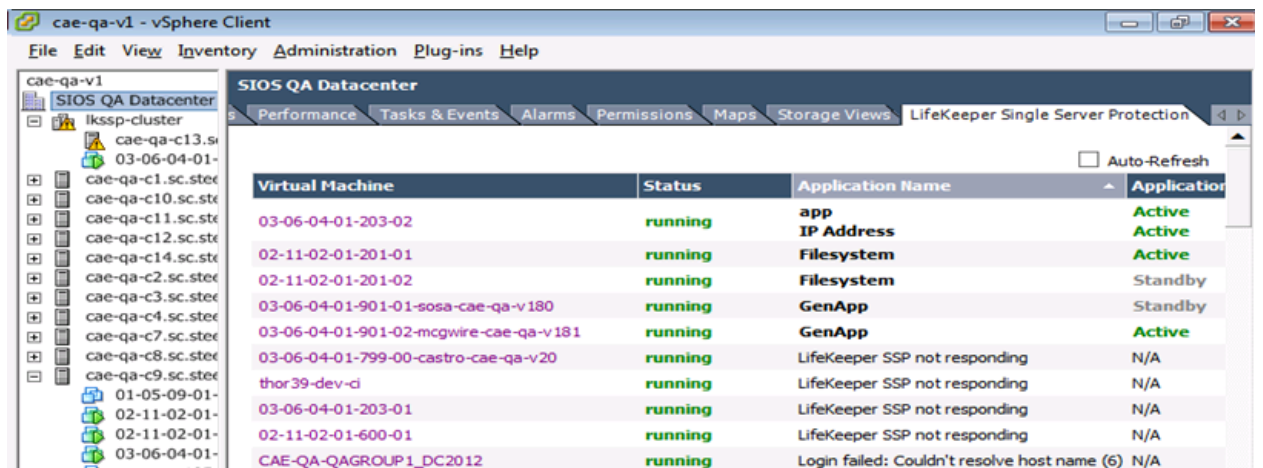


コンテキストメニュー

この vSphere Client プラグインにより、左側のインベントリツリーのクリック位置に合わせて、[LifeKeeper Single Server Protection] タブに複数のコンテキストレベルが表示されます。

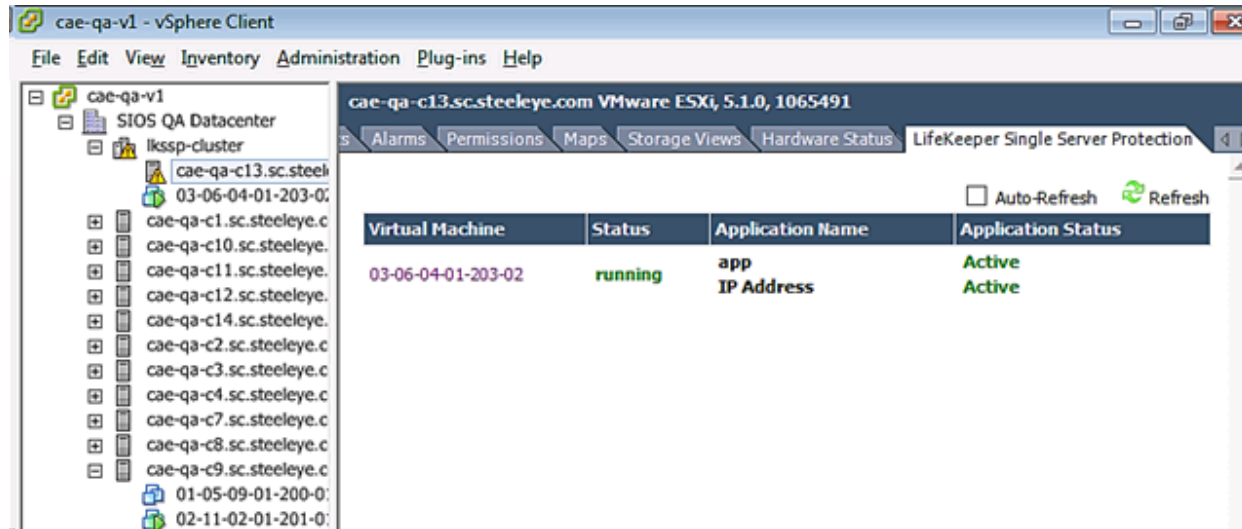
Datacenter Level

datacenter 内にある仮想マシンを表示します。



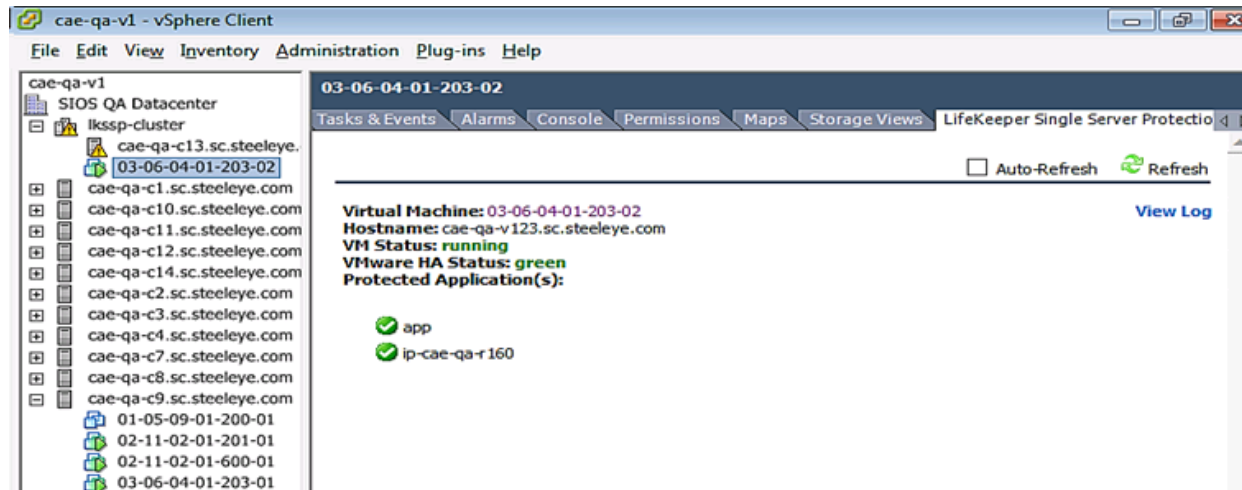
ESX or ESXi Level

特定ホストで動作中の仮想マシンのステータスを表示します。



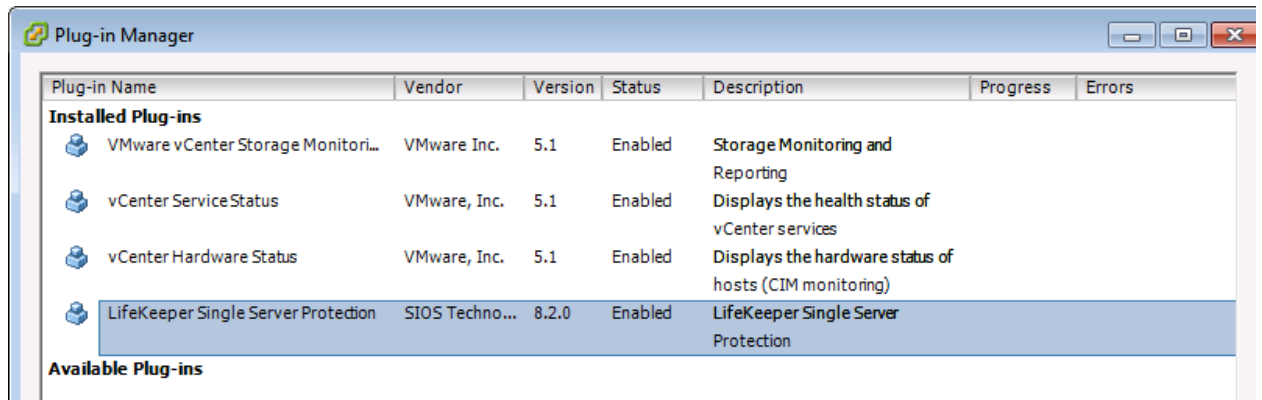
Virtual Machine Level

以下の特定ノードについて、情報を表示します。仮想マシン名、ホスト名、仮想マシンのステータス、VMware HA のステータス、保護対象のアプリケーション。また、LifeKeeper Single Server Protection のログを表示できる **[View Log]** リンクもあります。



Manage Plug-Ins

登録済みの LifeKeeper Single Server Protection vCenter プラグインのステータスを表示します。



その他の表示

LifeKeeper Single Server Protection プラグインは、**[Datacenter]**、**Virtual Application**、および **[Resource Pool]** のレベルでも表示できます。

認証情報の設定

SMC と LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアは、他のシステム (vCenter Server、または SIOS LifeKeeper Single Server Protection) との通信に使用する認証情報を **認証情報ストア** 経由で管理します。このストアは、例えばプラグインの登録時に使用されます ([vSphere Client プラグインの設定](#)を参照)。このストアは、必要に応じて `/opt/LifeKeeper/bin/credstore` コマンドで管理できます。このコマンドを使用すると、サーバアクセスに必要な認証情報をサーバごとに設定、変更、削除することができます。

認証情報の追加または変更

認証情報の追加と変更は同じ方法で実行できます。代表的な例として、サーバ `lkssp-server.mydomain.com` の認証情報を追加または変更する場合は次のようになります。

```
/opt/LifeKeeper/bin/credstore -k lkssp-server.mydomain.com myuser
```

この例では、`lkssp-server.mydomain.com` へのアクセスに使用するユーザ名として `myuser` を指定しています。パスワードを入力 / 確認するプロンプト (`passwd` など) が表示されます。

注記: LifeKeeper Single Server Protection サーバの認証情報を格納するために SMC で使用するキー名は、LifeKeeper Single Server Protection サーバのホスト名と完全に一致する必要があります (その vSphere Client プラグインの **[Hostname:]** フィールドに表示されるものと一致)。ホスト名が FQDN の場合、認証キーは FQDN である必要があります。ホスト名が短縮名の場合、キーも短縮名にする必要があります。

[セットアップの実行](#)時に以下の[Credential Considerations] (認証情報に関する考慮事項) が推奨された場合、特定のサーバキーが存在しないときには、対応するユーザ名とパスワードを持つ**デフォルト**キーが認証に使用されます。デフォルトキーを追加、変更するには以下のコマンドを実行してください。

```
/opt/LifeKeeper/bin/credstore -k default myuser
```

ストア内の認証情報のリスト表示

現在格納されている認証情報をリスト表示するには、以下のコマンドを実行します。

```
/opt/LifeKeeper/bin/credstore -l
```

これにより、認証情報ストア内に格納されているキーが表示されます。この場合の「キー」は、認証情報を使用する対象のサーバを示しています (認証情報自体は秘密情報のため、このコマンドが表示するのは、実際の認証情報の内容ではなくキーのみです)。

サーバの認証情報の削除

特定のサーバに対する認証情報を削除するには、以下のコマンドを実行します。

```
/opt/LifeKeeper/bin/credstore -d -k lkssp-server.mydomain.com
```

この例では、サーバlkssp-server.mydomain.comの認証情報ストアがストアから削除されます。

追加情報

credstore ユーティリティの詳細については、以下のコマンドを実行してください。

```
/opt/LifeKeeper/bin/credstore --man
```

コマンドのマニュアルページがすべて表示されます。

インストールの検証

SteelEye 管理コンソールのインストールを検証するには、Web ブラウザを使用して、<https://<smcserver>/> に接続します。インストールが正しく実行された場合、SMC サービスが利用可能であることを示すページが表示されます。**注記:** SMC は自己署名の SSL 証明書を使用するので、セキュリティ警告を受信するのは正常な動作です。この警告は安全に無視できます。

ブラウザにページの表示エラーが表示されるか、新規にインストールした SMC サーバへの接続に失敗した場合は、エラーが発生せずにすべてのインストール手順が完了したこと、および SMC サーバがネットワークにアクセス可能であることを確認してください。

トラブルシューティング

トラブルシューティングについては、[SMC のトラブルシューティング](#)セクションを参照してください。また、セキュリティ警告の詳細については、[vSphere Client プラグインのセキュリティ警告への対処](#)トピックを参照してください。

vSphere Client プラグインのセキュリティ警告 への対処

LifeKeeper Single Server Protection vSphere Client プラグインは、自己署名証明書を使用して SSL 通信を有効にします。プラグインのコンテンツを表示するときに、セキュリティ警告を受信するのは正常な動作です。セキュリティ警告を低減するには、vSphere Client システムの証明書ストアに「LK4Linux Valid SMC」証明書をインストールする必要があります。さらに、お使いのシステムの「Trusted Root Certification Authorities」証明書ストアに「SIOS Technology, Corp.」認証局 (CA) の証明書をインストールできます。

「LK4Linux Valid SMC」証明書をインストールするには、

1. セキュリティ警告が表示されたら、**[View Certificate]** を選択します。
2. **[Install Certificate]** ボタンをクリックします。
3. ウィザードの手順に従って、証明書をインストールします。

「Trusted Root Certification Authorities」証明書ストアに「SIOS Technology, Corp.」認証局 (CA) の証明書をインストールするには、

1. セキュリティ警告が表示されたら、**[View Certificate]** を選択します。
2. **[Certification Path]** タブをクリックします。
3. **SIOS Technology, Corp.** の証明書を選択します。
4. CA の証明書を表示するには、**[View Certificate]** をクリックします。
5. **[Install Certificate]** ボタンをクリックします。
6. **[Next]** をクリックします。
7. **[Certificate Store Wizard]** ペインの **[Place all certificates in the following store]** ラジオボタンを選択します。
8. **[Browse]** ボタンが有効になります。そのボタンをクリックします。
9. **[Select Certificate Store]** リストから、**[Trusted Root Certification Authorities]** を選択します。
10. **[OK]** をクリックします。
11. **[Next]** をクリックして、ウィザードを完了します。

LifeKeeper API

LifeKeeper API を使用すると、LifeKeeper Single Server Protection サーバと SteelEye 管理コンソール (SMC) との間の通信を行えるようになります。現在、この API は内部使用のみとして予約されていますが、将来のリリースではお客様とサードパーティが使用できるように公開される可能性があります。

ネットワーク設定

LifeKeeper Single Server Protection の各サーバは、ポート 778 の SSL 接続を使用してこの API を提供します。このポートは、`/etc/default/LifeKeeper` 内の設定変数 `API_SSL_PORT` を使用して変更できます。この変数は、SMC の `/etc/default/LifeKeeper.local.pl` に設定されます。(注記: この設定は、API クライアントと LifeKeeper Single Server Protection サーバの間の通信を制御します。SMC (常にポート 443) 自体へのアクセスは制御しません)。LifeKeeper Single Server Protection と SMC は両方とも、`API_SSL_PORT` に同じ値を使用する必要があります。

認証

LifeKeeper API は認証に PAM を使用します。API へのアクセス権限は、グループ `lkadmin`、`lkoper`、または `lkquest` のメンバーであるユーザにのみ付与されます。ユーザに権限を与えるには、システムの PAM 設定に応じて、ローカルシステムファイル (`/etc/passwd` および `/etc/group`) を使用するか、ユーザを LDAP または Active Directory のグループに追加します。

注記: LifeKeeper API は、`lkpasswd` ユーティリティで管理されるユーザデータベースは使用しません。

SMC による API の使用

SMC は API を使用して、LifeKeeper Single Server Protection サーバからの情報を収集します。SMC は `credstore` ユーティリティを使用して、LifeKeeper Single Server Protection サーバのユーザアカウント情報を管理します。SMC は認証情報ストアのキーとして LifeKeeper Single Server Protection のサーバ名を使用するので、LifeKeeper Single Server Protection サーバの認証情報を指定するときには、LifeKeeper Single Server Protection サーバのシステム名を `-k` オプションとして `credstore` ユーティリティに渡す必要があります。また、指定したサーバの認証情報が見つからない場合、SMC はデフォルトキーに保存されている認証情報をチェックして使用します。

カスタム証明書の使用

LifeKeeper Single Server Protection では、異なるシステムとの通信に SSL/TLS が使用されます。デフォルトでは、ノード間で一定の身元確認が可能なデフォルト証明書が SPS と共にインストールされます。このドキュメントでは、デフォルト証明書を組織独自の認証局 (CA) が作成した証明書に置き換える方法を説明します。

証明書の使用方法

SteelEye 管理コンソール (SMC) と LifeKeeper Single Server Protection サーバとの通信では、転送するデータを保護するために SSL/TLS が使用されます。双方のシステムは自身を特定する証明書を提示し、証明書を提示されたシステムは、CA 証明書を使用して提示された証明書を SSL 接続経路で確認します。

以下の 4 種類の証明書が使用されます。

- `/opt/LifeKeeper/etc/certs/LK4LinuxValidNode.pem` (LifeKeeper Single Server Protection server certificate)
- `/opt/LifeKeeper/etc/certs/LK4LinuxValidSMC.pem` (SMC server certificate)
- `/opt/LifeKeeper/etc/certs/LK4LinuxClient.pem` (LifeKeeper Single Server Protection client)

独自の証明書の使用

certificate, installed on all servers)

- /opt/LifeKeeper/etc/certs/LKCA.pem (certificate authority, installed on all servers)

最初の3つの証明書がサーバが実行する検証に合格するためには、4番目の証明書による署名が必要です。証明書の共通名は検証されません。証明書はCAによって署名されるのみということに注意してください。

独自の証明書の使用

運用環境によっては、デフォルト証明書を組織内部のCAが作成した証明書に置き換える必要がある場合があります。そのような場合は、上記の4種類の証明書を、同じ証明書ファイル名を持つ新しい証明書に置き換えます。これらの証明書はPEM形式です。LK4LinuxValidNode.pem、LK4LinuxValidSMC.pem、およびLK4LinuxValidClient.pemはそれぞれ、キーと証明書の両方を含んでいます。LK4LinuxValidNode.pem および LK4LinuxValidSMC.pem の証明書は、サーバタイプの証明書です。LK4LinuxValidClient.pemは、クライアントタイプの証明書です。

デフォルトの証明書を置換した場合、変更を反映するにはLifeKeeper Single Server Protection および SMC を再起動する必要があります。証明書の設定を間違えると、steeleye-lighttpd デーモンが起動に失敗し、LifeKeeper Single Server Protection のログファイルにエラーが記録されます。問題が発生した場合、このログファイルを参照すると実行すべき完全なコマンドを見ることができます。

インストール

LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアのインストール

LifeKeeper Single Server Protection (SSP) 構成内の各サーバに LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアをインストールしてください。

9.3以降のセットアップはパッケージマネージャ (yum もしくは zypper) を使用してパッケージをインストールするため、LifeKeeper が依存するパッケージは自動的にインストールされるようになりました。



重要: LifeKeeper Single Server Protection をインストールする前に、[Linux の依存関係トピック](#)を参照してください。

LifeKeeper Single Server Protection Core パッケージおよび他のオプションのリカバリキットは、LifeKeeper Single Server Protection インストールイメージファイル (*lkssp.img*) を使用して、コマンドラインでインストールします。このイメージファイルは、LifeKeeper Single Server Protection をシステムにインストールするときに必要なユーザ対話型もしくは非対話型のシステムセットアップ作業を実行するよう設計されたインストールスクリプト一式を提供します。インストールイメージファイルは、実行中の Linux ディストリビューションを特定し、一連の質問へのユーザの回答に基づいて、LifeKeeper Single Server Protection を正常にインストールするために必要なさまざまなパッケージをインストールします。ライセンスがインストールされた後にサーバの Host ID と Entitlement ID を取得して表示するユーティリティを提供するライセンシングパッケージもインストールされます。Entitlement ID は LifeKeeper Single Server Protection を実行するための有効なライセンスの取得に使用され、ソフトウェアに付属しています。

[LifeKeeper Single Server Protection リリースノート](#)を参照してください。

注記: これらのインストール手順は、読者がサーバにインストールされた Linux オペレーティングシステムに精通していることを前提としています。



重要:

- LifeKeeper Single Server Protection は共有ストレージサポートまたは I/O フェンシングを提供しません。各サーバはアプリケーションデータにローカルディスクストレージを使用する必要があります。
- すべての LifeKeeper Single Server Protection パッケージは、`/opt/LifeKeeper` ディレクトリにインストールされます。

LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアのインストール

インストール作業は[セットアップスクリプトの操作](#)を参照してください。

アップグレード方法については、[SSP のアップグレード](#)を参照してください。

Chapter 2: インストール

セットアップスクリプトは、LifeKeeper SSPをインストールするために以下の作業を行います。

1. 環境情報の収集

スクリプトがLifeKeeper SSPを動作させるために必要な情報を収集します。
これには数十秒から数分程度かかります。

2. 構成の決定

使用する機能や保護対象アプリケーションを決定します。
対話画面で個別に決定していくか、あらかじめ用意した構成情報ファイルを用いて非対話で一括して決定することが可能です。

3. パッケージのインストールと設定変更

ステップ2で決定した構成を元に、スクリプトが必要なパッケージのインストール及び設定変更を行います。

セットアップの手順

1. root ユーザでログイン後、次のコマンドを使用して、lkssp.img ファイルをマウントします。

```
mount <PATH/IMAGE_NAME> <MOUNT_POINT> -t iso9660 -o loop
```

ここで、PATH はイメージへのパスです
IMAGE_NAME はイメージの名前です
MOUNT_POINT はマウント位置へのパスです

2. lkssp.imgがマウントされたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力します。

```
./setup [コマンドオプション]
```

指定可能なオプションは「[setup スクリプトのオプション](#)」を参照してください。

3. スクリプトを実行すると、まず環境情報の収集を行います。

対話モードでは、収集した環境情報を収集した結果、問題があると判断された場合は重要度に応じて「Pre-install check failed!!」もしくは「Pre-install warning」の画面に切り替わります。

「Pre-install check failed!!」は、インストールを行う環境がLifeKeeper SSPのインストール要件を満たしていない等の重大な問題を検出した場合に表示されます。これが表示された場合にはインストールを続行することは出来ないので、スクリプトは中断されます。

「Pre-install warning」はLifeKeeper SSPを使用することは可能ですが、手動での設定変更が必要な場合や、一部機能が制限される場合などに表示されます。これが表示された場合でもインストールを継続することは可能です。

なにも問題がなかったか、「Pre-install warning」で継続した場合はメニュー画面に切り替わります。メニュー画面の操作は「[対話画面の操作](#)」を参照して下さい。

インストール後の構成変更

非対話モードでは、問題を発見した場合にはその結果を表示してスクリプトは終了します。「Pre-install warning」に相当する問題の場合はスクリプト実行時に"-q y" オプションを指定して再実行することで、インストールを継続することが出来ます。

4. 構成を決定すると、実際のインストール作業が開始されます。

インストール中に問題が発生した場合にはエラーメッセージが表示されるので、問題を解消してからセットアップスクリプトを再度実行してください。

また、インストール完了後に "Important notice" が出力された場合は、その指示に従ってください。

インストール後の構成変更

インストール後に構成変更を行う場合は setup を再実行して下さい。

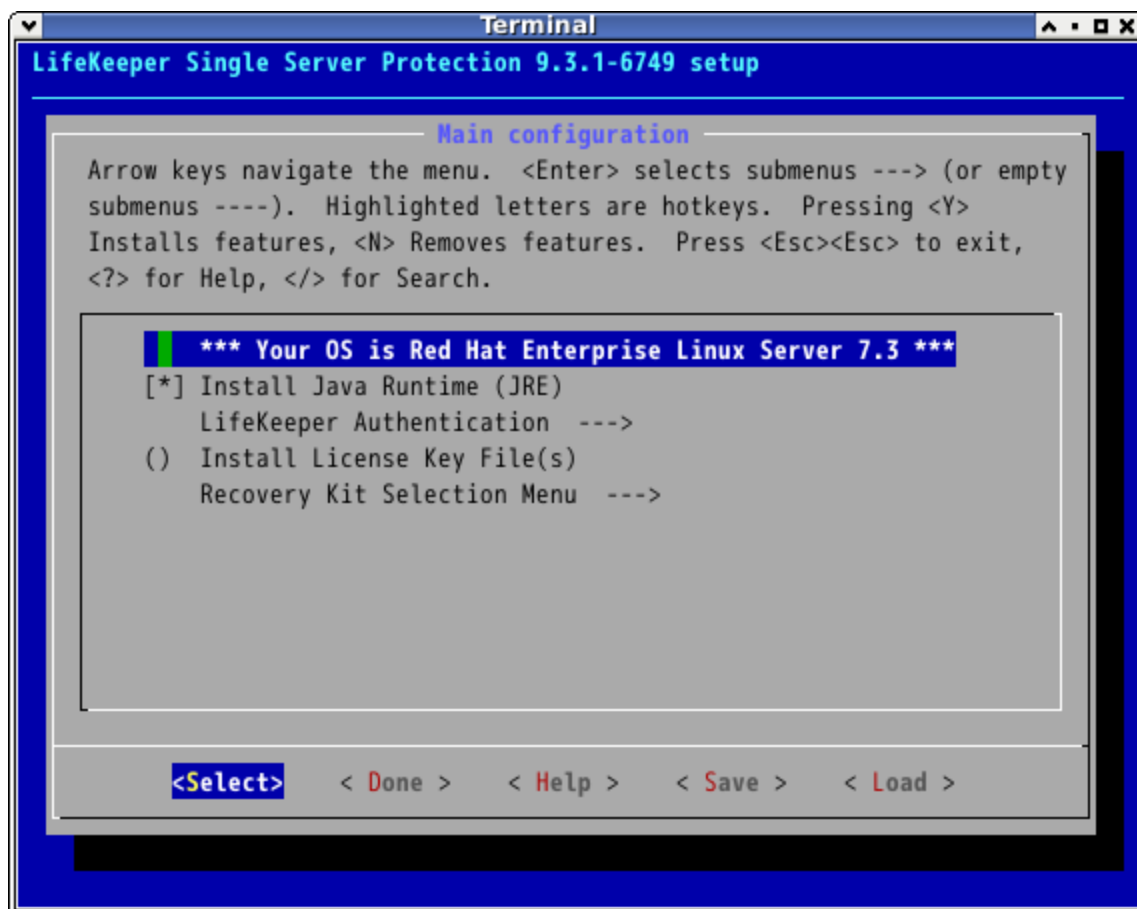
選択した機能は追加でインストールされ、選択を解除した機能はアンインストールされます。

修復インストール

何らかの理由で LifeKeeper SSP を再インストールする場合は「--force」オプションを指定して setup を再実行して下さい。

対話画面の操作

LifeKeeper SSP の構成を以下の画面で決定します。



以下のキーで項目選択を行います。

↑↓	選択項目の移動
TAB	最下行ボタンの移動
SPACE / Enter	選択されているボタンの処理を実行

最下行ボタンは以下の動作を行います。

Select	選択項目のON / OFF・子画面へ移動
Done	現画面を終了して親画面に戻ります Main Configuration画面の場合は、メニュー画面を終了して、インストールの確認画面へ移行します
Help	選択項目のヘルプ画面を表示します
Save	設定した構成情報をファイルに保存します 保存した構成情報ファイルは非対話モードでのインストールに使用できます
Load	保存済み構成情報ファイルの読み込み

各項目では以下の機能を設定できます。

認証の設定

なお、各項目は設定が必要な場合のみ表示されます。

- **Install Java Runtime (JRE)**

LifeKeeper SSP の GUI が使用する Java 実行環境をインストールします。

- **LifeKeeper Authentication**

LifeKeeper SSP を管理するために必要なユーザーの登録を行います。
子画面に移動します。

- **Install License Key File(s)**

LifeKeeper SSP のライセンスファイルを指定します。ファイル名を入力できるダイアログに切り替わるので、ライセンスファイルのフルパス名を入力して下さい。スペース区切りで複数のライセンスファイルを指定することができます。

ライセンスの取得方法については[ライセンスの取得とインストール](#)を参照してください。

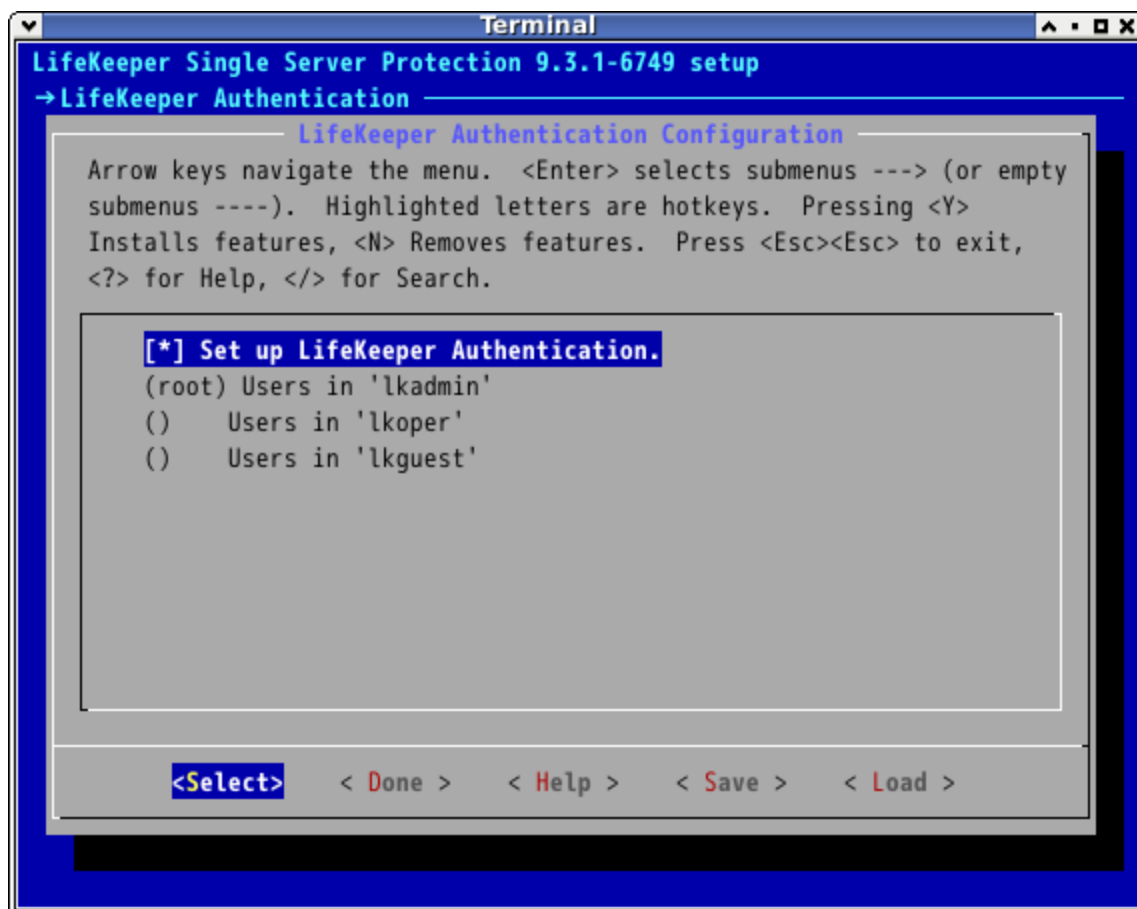
- **Recovery Kit Selection Menu**

保護対象アプリケーションに対応したリカバリキットを選択します。
子画面に移動します。

- **LifeKeeper Startup After Install**

インストールもしくはアップデート完了後に LifeKeeper SSP を起動します。
LifeKeeper SSP が起動可能な場合のみ選択可能です。

認証の設定



以下の項目を設定可能です。

- **Set up LifeKeeper Authentication.**

選択するとユーザー情報の設定を行います。

リモートで認証する設定 (NIS / LDAP など) の場合は選択しても反映されません。

- **Users in 'lkadmin' / Users in 'lkoper' / Users in 'lkguest'**

各グループに所属するユーザー名を指定できます。

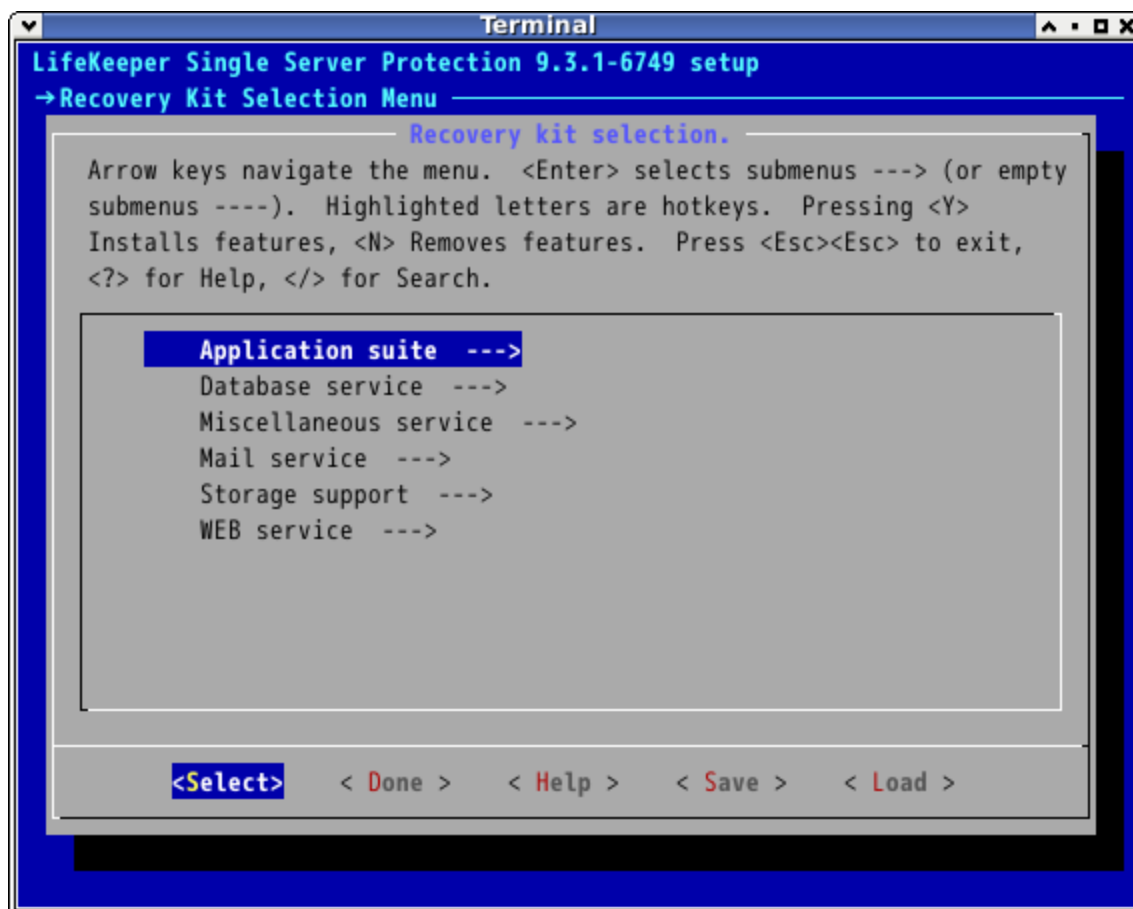
各グループの機能はテクニカルドキュメンテーションの [GUI ユーザー設定](#) を参照してください。

リカバリキットの選択

各リカバリキットはカテゴリごとに分類されています。

カテゴリを選択して、その中から個々のリカバリキットを選択して下さい。

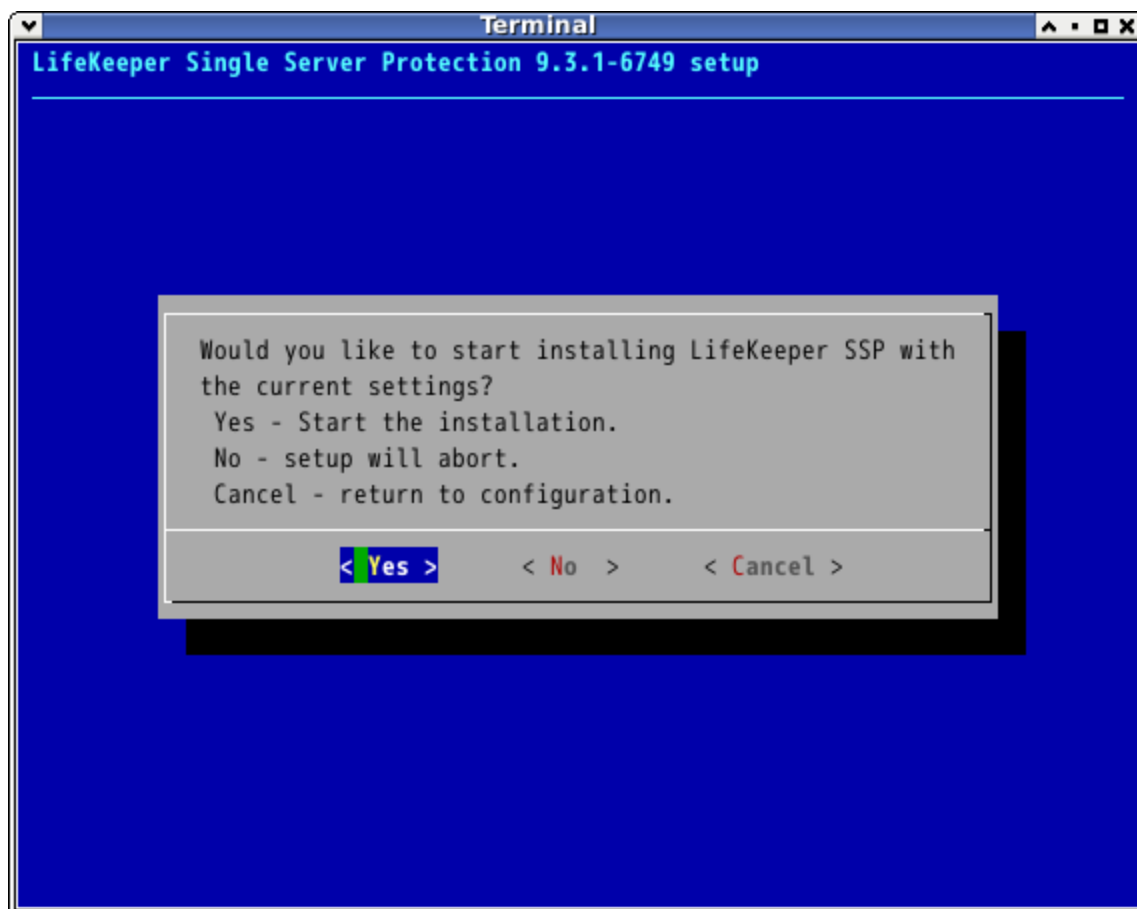
インストール開始前の確認



各カテゴリは以下の意味を持ちます。

カテゴリ	説明
Application suite	SAP/MQ など上位のアプリケーションを保護するリカバリキットが所属します
Network / Communication	ネットワークサービスに関係するリカバリキット及び IP リカバリキットと協調して動作するリカバリキットが所属します
Database service	各種データベースを保護するリカバリキットが所属します
Miscellaneous service	ファイルサーバーなど、汎用的なサービスを保護するリカバリキットが所属します
Mail service	メールサーバーを保護するリカバリキットが所属します
Storage support	ファイルシステム・ストレージに関係するリカバリキットが所属します
WEB service	WEBサーバーを保護するリカバリキットが所属します

インストール開始前の確認



Main Configuration 画面で Done を選択すると、この画面に移動します。

ここで実際のインストールを行うための最終確認が行われます。TAB キーでボタンを移動してEnter で確定します。

各ボタンは以下の動作を行います。

Yes	インストールを開始します
No	インストールを中断してスクリプトを終了します
Cancel	Main Configuration に戻ります

setup スクリプト のオプション

setup スクリプトは以下のオプションを指定して実行することができます。

- -f <file>

非対話的にインストールを行います。file は対話画面で Save することで保存される構成ファイルを指定します。

setup スクリプトのオプション

- -q <y/n>

非対話モードでインストールする時に、確認項目に対する応答を指定します。
現在は "y" を指定すると、Pre-install warning に了解しインストールを継続という意味を持ちます。

- --force

すでにインストール済みのパッケージを強制的に再インストールします。

Upgrade_LifeKeeper_Single_Server_Protection

SSP のアップグレード

LifeKeeper Single Server Protection (SSP) は、既存の階層を保ちながら将来のリリースにアップグレードすることができます。

注記: 最新バージョンの LifeKeeper Single Server Protection にアップグレードできるのは、2 世代前までのバージョンです。それより前のバージョンからアップグレードする場合、古いバージョンをアンインストールし、LifeKeeper Single Server Protection を再インストールする必要があります。旧バージョンをアンインストールする代わりに、旧バージョンを 1 世代前もしくは 2 世代前のバージョンにアップグレードした上で、最新バージョンにアップグレードする方法もあります。

注記: アップグレード中に lkbbackup を使用する場合の詳細については、[lkbbackup の既知の問題](#)を参照してください。

1. 必要な場合、SSP をアップグレードする前に、Linux オペレーティングシステムをアップグレードしてください。
2. [セットアップスクリプトの操作](#)を参照してLifeKeeperをアップグレードします。

LifeKeeper Single Server Protection では、サーバごとに別々のライセンスが必要です。ライセンスは、ランタイムライセンスです。つまり、LifeKeeper Single Server Protection のインストールはライセンスなしでも可能ですが、正常に製品を起動して実行するためには、事前にライセンスをインストールする必要があります。

インストールスクリプトによってインストールされるライセンスユーティリティパッケージは、LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアの初期インストール時にサーバの使用可能なすべての Host ID を取得して表示します。ライセンスがインストールされると、このユーティリティは Entitlement ID (使用可能な場合) または Host ID (使用できない場合) を返します。

注記: Host ID が表示される場合は常に NIC の MAC アドレスに基づいています。

SIOS Technology Corp. ライセンス管理ポータルから取得した LifeKeeper Single Server Protection ライセンスには Entitlement ID が含まれ、クラスタ内の特定のノードにロックされることはありません。LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアと一緒に提供された Entitlement ID (認証コード) は、LifeKeeper Single Server Protection ソフトウェアを実行するために必要なパーマネントライセンスを取得するために使用されます。このプロセスを以下の図に示します。



注記: ソフトウェアパッケージごとに、サーバごとのライセンスが必要になります。

LifeKeeper Single Server Protection クラスタ内の各サーバについてライセンスを取得してインストールするには、次の手順を行います。

1. **LifeKeeper Entitlement ID (認証コード) があることを確認してください。** ライセンスの取得に必要な Entitlement ID を含むソフトウェアをメールで受け取っているはずですが。
2. **SIOS Technology Corp. ライセンス管理ポータルでライセンスを取得してください。**
 - a. インターネットアクセスが可能なシステムを使用して、[SIOS Technology Corp. ライセンス管理ポータル](#)にログインしてください。
 - b. **[Manage Entitlements]** を選択してください。

注記: パスワードを変更する場合は、画面の右上隅にある **[Profile]** ボタンを使用してください。
 - c. **[Entitlement ID]** を探して、行項目の左にあるボックスをオンにすることで、その Entitlement ID に関連付けられた各 **[Activation ID]** を選択してください。
 - d. **[Activate]** タブを選択してください。
 - e. 必要なフィールドを定義して、**[Next]** を選択してください。
 - f. **[Add New Host]** をクリックして、新しいホストを作成してください。

- g. [Node Locked Host] リストから **[Any]** を選択して、**[Okay]** をクリックしてください。
 - h. **[Host ID]** の左にあるボックスをオンにして、**[Generate]** を選択してください。
[Fulfillment ID] が **[License Summary]** 画面に表示されます。
 - i. **[Fulfillment ID]** の左にあるボックスをオンにして、**[Email License]** タブを選択してください。
 - j. ライセンスの送信先となる有効なメールアドレスを入力して、**[Send]** を選択してください。
 - k. **[Complete]** を選択してください。
 - l. メールを取得してください。
 - m. ファイルを適切なシステムにコピーにしてください。
3. ライセンスをインストールしてください。各システムで、ライセンスファイルを `/var/LifeKeeper/license` にコピーするか、または各システムで、`/opt/LifeKeeper/bin/lkkeyins` を実行してファイルに対するファイル名 (フルパスを含む) を指定してください。

リソースポリシー管理

概要

LifeKeeper Single Server Protection (SSP) のリソースポリシー管理では、リソースのローカルリカバリとフェイルオーバーの動作管理機能が提供されます。リソースポリシーは、**lkpolicy** コマンドラインツール (CLI) を使用して管理できます。

LifeKeeper SSP のリカバリ動作

LifeKeeper SSP には、個々のアプリケーションおよび関連し合うアプリケーションのグループを監視する機能があり、定期的にローカルリカバリを実行したり、保護下のアプリケーションに障害が発生したときに通知したりすることができます。関連し合うアプリケーションの例としては、主アプリケーションが下位のストレージまたはネットワークリソースに依存する階層などがあります。アプリケーションまたはリソースに障害が発生した場合のデフォルトの動作は以下の通りです。

1. **ローカルリカバリ:** 最初に、リソースまたはアプリケーションのローカルでリカバリを試みます。このときは、外部の介入なしにローカルサーバ上でリソースまたはアプリケーションをリストアしようとする。ローカルリカバリが成功した場合、LifeKeeper SSP は追加のアクションを実行しません。
2. **フェイルオーバー:** 次に、ローカルリカバリでリソースまたはアプリケーションのリストアに失敗した (またはリソースを監視するリカバリキットがローカルリカバリをサポートしていない) 場合、**フェイルオーバー** が開始されます (下記の標準ポリシーセクションの [Failover](#) を参照)。

リカバリ動作の詳細については、[LifeKeeper Single Server Protection 障害検出とリカバリのシナリオ](#) を参照してください。

ポリシーによるカスタム動作およびメンテナンスモード動作

LifeKeeper SSP は、デフォルトのリカバリ動作を変更する追加ポリシーを設定する機能をサポートします。リソース単位またはサーバ単位で、4つのポリシーが設定可能です(リソース単位のポリシーに関する注意については下のセクションを参照してください)。サーバレベルでポリシーを変更する方法を推奨します。

利用可能なポリシーは以下の通りです。

標準ポリシー

- **Failover** - LifeKeeper SSP では、このポリシー設定を使用すると、リソースフェイルオーバーを有効 / 無効にできます (これによって再起動されます)。
- **LocalRecovery** - LifeKeeper SSP は、デフォルトでは、フェイルオーバー(再起動)を実行する前に、個々のリソースまたは保護対象アプリケーション全体を再起動することにより、保護対象リソースのリカバリを試みます。このポリシー設定を使用すると、ローカルリカバリを有効 / 無効にできます。
- **TemporalRecovery** - 通常、LifeKeeper SSP は、障害リソースのローカルリカバリを実行します。ローカルリカバリに失敗すると、LifeKeeper SSP は再起動を実行します。ローカルリカバリに成功した場合は、フェイルオーバー(再起動)は実行されません。

ローカルリカバリに成功した場合でも、サーバの何らかの異常によって短時間の間にローカルリカバリが再試行される場合があります、結果として何度も連続してローカルリカバリが試行されることとなります。これが発生すると、問題のアプリケーションは可用性が悪化します。

この反復的なローカルリカバリ / 障害 サイクルを回避するために、時間的リカバリポリシーを設定できます。時間的リカバリポリシーを使用すると、管理者は指定した時間内に試行するローカルリカバリの回数を (成功かどうかにかかわらず) 制限することができます。

ソースが試行するローカルリカバリの回数を 30 分間で 3 回に限定するポリシー定義をユーザが設定した場合、30 分以内に 3 回目のローカルリカバリが試行されると、LifeKeeper SSP はフェイルオーバー(再起動)を実行します。

定義した時間的リカバリポリシーは有効または無効にできます。時間的リカバリポリシーが無効の場合、時間的リカバリ処理は継続して実行され、ポリシーが適用されるはずの時間に通知がログに表示されますが、実際のアクションは実行されません。

注記: 時間的リカバリポリシーを設定した状態で、フェイルオーバーとローカルリカバリの一方または両方を無効にすることは可能です。フェイルオーバーまたはローカルリカバリを無効にした場合に、時間的リカバリポリシーは実行されることがないため、この状態は非論理的です。

メタポリシー

「メタ」ポリシーは、他の複数のポリシーに影響を与える可能性があるポリシーです。通常、これらのポリシーは、標準ポリシーであれば複数個の設定が必要になるような特定のシステム動作を実現するためのショートカットとして使用します。

- **NotificationOnly** - このモードでは、管理者は LifeKeeper SSP を「監視専用」状態にすることができます。1 つのリソース (または、サーバ単位のポリシーの場合はすべてのリソース) のローカルリカバリおよびフェイルオーバー(再起動)の両方が影響を受けます。障害が検知されると、ユーザ

インターフェースには **Failure** 状態が表示されます。ただし、リカバリもフェイルオーバ(再起動)も実行されません。**注記:** 管理者は、障害の原因となった問題を手動で修正し、障害が起きたリソースを復帰させて通常の LifeKeeper SSP の運用を継続する必要があります。

リソースレベルのポリシーに関する重要な考慮事項

リソースレベルのポリシーとは、リソース階層全体またはサーバレベルのポリシーとは異なり、特定のリソースにのみ適用されるポリシーです。

例:

アプリケーション

- IP

- file system

上記のリソース階層では、アプリケーションは IP とファイルシステムの両方に依存しています。ポリシーは、特定のリソースのローカルリカバリまたはフェイルオーバを無効にするように設定できます。これは、例えば、IP リソースのローカルリカバリが失敗し、IP リソースのフェイルオーバが無効に設定されていた場合、IP リソースはフェイルオーバを実行せず、他のリソースのフェイルオーバも発生させないことを意味します。ただし、ファイルシステムリソースのローカルリカバリが失敗し、ファイルシステムリソースのポリシーのフェイルオーバが無効化されていない場合、階層全体が再起動を伴うフェイルオーバを実行します。

注記: 重要事項として、リソースレベルのポリシーは設定対象の特定のリソースにのみ適用されることに注意してください。

上記は単純な例です。複雑な階層を構成することもできるため、リソースレベルのポリシーを設定するときは注意してください。

lkipolicy ツール

lkipolicy ツールは、LifeKeeper SSP が稼働するサーバのポリシーを管理 (参照、設定、削除) するためのコマンドラインツールです。lkipolicy は、ポリシーの設定および修正、ポリシーの削除、利用可能なポリシーと現在の設定値の表示をサポートします。さらに、設定したポリシーは、有効または無効に設定できるため、リカバリ動作に影響を与えながらリソース / サーバ設定を保持できます。

全体的な使用方法は次の通りです。

```
lkipolicy [--list-policies | --get-policies | --set-policy | --remove-policy] <name value pair data...>
```

<name value pair data...> は、運用方法および対象のポリシーによって異なります (特にポリシーを設定する場合)。たとえば、以下ようになります。有効 / 無効タイプのポリシーのほとんどでは、必要なのは `-on` or `--off` のスイッチのみですが、時間的ポリシーの場合は、しきい値を設定するための値も必要です。

lkpolicy の使用方法の例

ローカルおよびリモート サーバとの認証

lkpolicy ツールは、サーバが公開する API を通じて LifeKeeper SSP サーバと通信します。この API は、lkpolicy ツールなどのクライアントに対して認証を要求します。lkpolicy ツールで LifeKeeper SSP サーバに最初にアクセスしようとしたときに、そのサーバに対する認証情報がまだ保存されていない場合、ユーザは認証情報を求められます。認証情報はユーザ名とパスワードの形式であり、さらに以下の条件があります。

1. クライアントには LifeKeeper SSP の管理者権限が必要です。したがって、そのユーザ名は、(PAM による)オペレーティングシステムの認証設定によって lkadmin グループに属する必要があります。必ずしも root で実行する**必要はありません**が、root ユーザはデフォルトで適切なグループに属しているため、root を使用することもできます。
2. 認証情報は**認証情報ストア**に保存されるため、ツールを使用してこのサーバにアクセスするたびに手動で認証情報を入力する必要はありません。

認証情報ストアと credstore ユーティリティによる管理の詳細については、[SIOS Protection Suite の認証情報の設定](#)を参照してください。

lkpolicy によるセッションの例は以下 のようになります。

```
[root@thor49 ~]# lkpolicy -l -d v6test4
Please enter your credentials for the system 'v6test4'.
Username: root
Password:
Confirm password:
Failover
LocalRecovery
TemporalRecovery
NotificationOnly
[root@thor49 ~]# lkpolicy -l -d v6test4
Failover
LocalRecovery
TemporalRecovery
NotificationOnly
[root@thor49 ~]#
```

ポリシーのリスト表示

```
lkpolicy --list-policy-types
```

現在のポリシーの表示

```
lkpolicy --get-policies
```

```
lkpolicy --get-policies tag=\\*
```

```
lkpolicy --get-policies --verbose tag=mysql\\* # all resources starting with mysql
```

```
lkpolicy --get-policies tag=mytagonly
```

ポリシーの設定

```
lkpolicy --set-policy Failover --off
```

```
lkpolicy --set-policy Failover --on tag=myresource
```

```
lkpolicy --set-policy Failover --on tag=\\*
```

```
lkpolicy --set-policy LocalRecovery --off tag=myresource
```

```
lkpolicy --set-policy NotificationOnly --on
```

```
lkpolicy --set-policy TemporalRecovery --on recoverylimit=5 period=15
```

```
lkpolicy --set-policy TemporalRecovery --on --force recoverylimit=5 period=10
```

ポリシーの削除

```
lkpolicy --remove-policy Failover tag=steve
```

注記: *NotificationOnly* はポリシーのエイリアスです。 *NotificationOnly* を有効にすることは、対応する *LocalRecovery* および *Failover* ポリシーを無効にすることと同じです。

LifeKeeper Single Server Protection のインストールの検証

LifeKeeper Single Server Protection パッケージが正常にインストールされたことを確認するには、コマンドラインで次のように入力してください。

```
rpm -V <package name>
```

注記: パッケージが正しくインストールされている場合、このコマンドは何も出力しません。

コマンドラインから照会を実行するには、次のように入力してください。

```
rpm -qi <package name>
```

注記: このコマンドの予想される出力は、パッケージ情報です。

LifeKeeper Single Server Protection の管理の概要

LifeKeeper Single Server Protection は操作時に管理を必要としません。LifeKeeper Single Server Protection は、保護されたリソースを監視し、障害が発生した場合に指定されたリカバリアクションを実行するように、自動的に機能します。以下のケースでは LifeKeeper Single Server Protection GUI を使用します。

- **リソースおよび階層の定義**。LifeKeeper Single Server Protection は次のインターフェースオプションを提供します。
 - LifeKeeper Single Server Protection GUI。
 - LifeKeeper Single Server Protection コマンドラインインターフェース。
- **リソース監視**。LifeKeeper Single Server Protection GUI は、リソースステータス情報および LifeKeeper Single Server Protection ログへのアクセスを提供します。
- **手動での処理**。メンテナンスやその他の管理アクションのために、サーバまたは特定のリソースを停止することが必要になる場合があります。LifeKeeper Single Server Protection GUI には、特定のリソースを稼働させたり停止させたりすることができるメニュー機能が用意されています。アプリケーションが LifeKeeper Single Server Protection の保護下に置かれると、これらの LifeKeeper Single Server Protection のインターフェースを介してのみアプリケーションを起動および停止させることができます。LifeKeeper Single Server Protection の起動および停止は、コマンドラインを介してのみ行われます。

リソース階層の作成など、管理、設定、およびメンテナンス操作を実行する詳細な手順については、SPS for Linux ドキュメンテーションの[管理作業](#)、[GUI の作業](#)、および[メンテナンス作業](#)を参照してください。

※ LifeKeeper が提供しているコマンド (実行可能なスクリプトやプログラム) を実行するには、スーパーユーザ権限が必要です。

su コマンドや sudo でスーパーユーザ権限を付与したユーザで、LifeKeeper のコマンドを実行することは可能ですが、SIOS Technology Corp では、root ユーザ以外で LifeKeeper のコマンドのテストはしていません。

VMware HA と LifeKeeper Single Server Protection の連携を有効にする

デフォルトでは、VMware VM 上にインストールした場合、LifeKeeper Single Server Protection と VMware HA の連携は無効になっています。連携を有効にするには、以下の手順が必要です。

1. LifeKeeper Single Server Protection VM に VMware Tools をインストールしてください。
2. `/etc/default/LifeKeeper` を編集して、VMware HA 連携を調整する `HA_DISABLE` の値を 1 から 0 に変更します。
3. LifeKeeper Single Server Protection を再起動します。LifeKeeper Single Server Protection が実行中の場合、`/etc/default/LifeKeeper` の上記の変更内容が検出されるように、停止してから再起動する必要があります。
4. [SteelEye 管理コンソール](#) をインストールします (オプション)。

VMware HA を有効化した障害検出およびリカバリシナリオ

アプリケーション内の問題を検出して通知する機能は、最適な総合的耐障害性ソリューションを構築する上で非常に重要です。すべての個々のアプリケーションは、障害発生メカニズムと形式によって異なるため、一般的なメカニズムを示すことはできません。ただし、一般的に、多くのアプリケーションの設定は、LifeKeeper Single Server Protection に用意されている Core システムのエラー検出機能を利用することができます。このトピックでは、LifeKeeper Single Server Protection Core の機能について説明します。

アプリケーションに障害が発生したときに LifeKeeper Single Server Protection が障害を検出しリカバリを実行する仕組みを説明したリカバリシナリオを以下に示します。

1. LifeKeeper Single Server Protection は最初に、アプリケーションを再起動することでリカバリを試みます。
2. リカバリが成功した場合、アプリケーションは正常動作を継続します。
3. リカバリに失敗した場合、以下の処理が実行されます。
 - a. LifeKeeper Single Server Protection が HA を有効 (`/etc/default/LifeKeeper` で `HA_DISABLE=0`) にした VMware ゲスト OS にインストールされている場合にリカバリに失敗すると、LifeKeeper Single Server Protection がアプリケーション監視インターフェースに送信するハートビートを抑制することで VMware HA がトリガされます。VMware HA はサーバを再起動することで応答します。
 - b. LifeKeeper Single Server Protection が VMware ゲスト OS にインストールされていないか、HA を無効 (`/etc/default/LifeKeeper` で `HA_DISABLE=1`) にした VMware ゲスト OS にインストールされている場合にリカバリに失敗すると、システムが強制的に再起動されます。

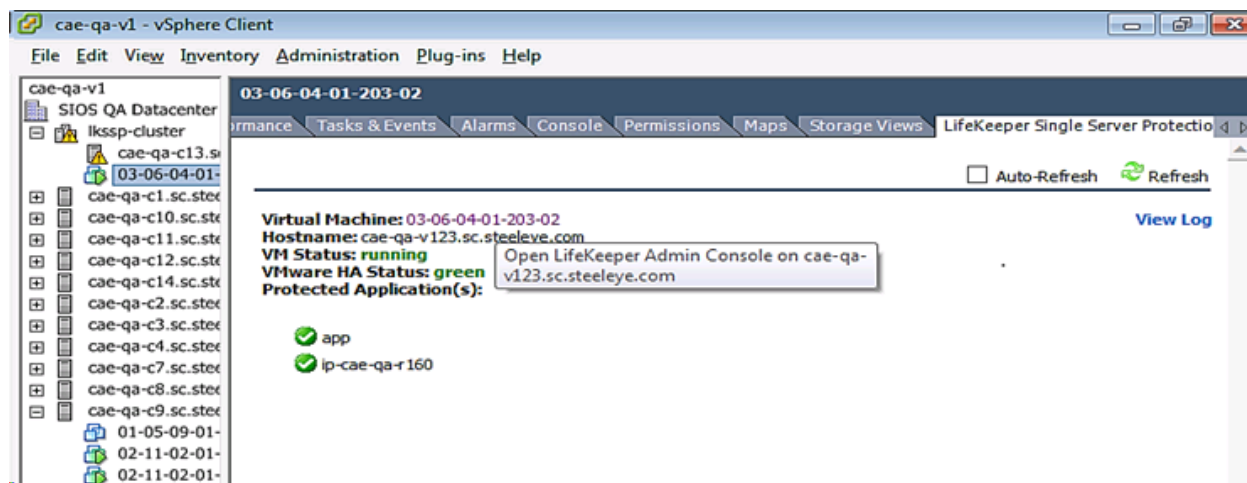
必要に応じて、LifeKeeper Single Server Protection を **通知のみモード** にすることができます。このモードでは、システム再起動の自動トリガは無効になります (以下の VMware HA と通知のみモードセクションを参照)。**通知のみモード** では、ユーザがシステムにログインし、障害の原因になった問題を修正する必要があります。

VMware HA と通知のみモード

1. VMware ゲスト OS で HA が有効にされ、[LifeKeeper SSP vCenter プラグイン](#) がインストールされた **通知のみモード** では、障害が検出された場合、LifeKeeper Single Server Protection はアプリケーションの再起動を行いません。その代わりに、リソースは **[Failed]** とマークされます。[vCenter プラグイン](#) ダッシュボードのステータス表示画面には障害が表示されます (**[Application Status] : [Failed]**)。

Application Name	Application Status
Login failed: Couldn't resolve host name (6)	N/A
Apache	Failed
Login failed: Couldn't connect to server (7)	N/A
Login failed: Couldn't connect to server (7)	N/A
N/A	N/A
Login failed: Couldn't resolve host name (6)	N/A

2. サーバにログインして、障害の原因になった問題を修正します。
3. CLIを使用するか、vSphere Client ユーザーインターフェース内の保護対象仮想マシンをクリックして、LifeKeeper 管理コンソールを開いてください。



4. アプリケーションを In Service に戻します。
5. vSphere Client ユーザーインターフェース内のダッシュボード表示に移動します。
6. [Refresh] をクリックします。[Application Status] は [Active] に戻ります。

Application Name	Application Status
Login failed: Couldn't resolve host name (6)	N/A
Apache	Active
Login failed: Couldn't connect to server (7)	N/A
Login failed: Couldn't connect to server (7)	N/A
N/A	N/A
Login failed: Couldn't resolve host name (6)	N/A

LifeKeeper Single Server Protection ハートビートと VMware HA

LifeKeeper Single Server Protection ハートビートは、保護対象のアプリケーションが正常であることを示すために、(VMware ゲスト OS で動作し、HA が有効である場合、10 秒ごとに) VMware HA に送信される信号です。アプリケーションで障害が発生すると、LifeKeeper Single Server Protection は最初にアプリケーションを復旧しようとします。復旧に失敗すると、LifeKeeper Single Server Protection はハートビートを抑制し、VMware HA に VM の再起動を指示します。

LifeKeeper Single Server Protection で保護するシステムのメンテナンス

LifeKeeper Single Server Protection で保護されているサーバでシステムまたはアプリケーションのメンテナンスを実行するときには、LifeKeeper Single Server Protection による監視を停止するか、保護対象のリソースをメンテナンスモードにしてください。これにより、アプリケーションのリカバリ、および VMware HA の障害イベントのトリガが無効になるので、LifeKeeper Single Server Protection がシステムやアプリケーションのメンテナンス作業に干渉しなくなります。

LifeKeeper Single Server Protection を停止して再起動するには、以下の操作を実行してください。

1. **LifeKeeper Single Server Protection を停止します。** `/etc/init.d/lifekeeper stop-daemons` コマンドを使用して、LifeKeeper Single Server Protection を停止してください。リソースは継続して動作しますが、LifeKeeper Single Server Protection からは監視されなくなります。障害は手動で処理する必要があります。
2. **メンテナンスを実行します。** 必要なメンテナンスを実行します。
3. **SIOS LifeKeeper Single Server Protection を起動します。** `/etc/init.d/lifekeeper start` コマンドを使用して、LifeKeeper Single Server Protection を開始してください。リソースが保護されている状態になります。

別の方法 - リソースをメンテナンス(「通知のみ」とも呼ばれる)モードにします。以下の操作を実行してください。

1. **リソースをメンテナンスモードにします。** `/opt/LifeKeeper/bin/lkpolicy -s NotificationOnly --On` コマンドを使用してください。リソースは復旧されなくなり、VMware HA の障害イベントがトリガされなくなります。
2. **メンテナンスを実行します。** 必要なメンテナンスを実行します。
3. **メンテナンスモードをオフにします。** `/opt/LifeKeeper/bin/lkpolicy -s NotificationOnly --Off` コマンドを使用してください。リソースが保護されている状態になります。

Quick Service Protection (QSP) Recovery Kit

QSP Recovery Kit は、OSのサービスを簡易的に保護する仕組みを提供します。OSのserviceコマンドで起動 (start)・停止 (stop) ができるサービスであれば、容易にリソースが作成できます。Generic Applicationを使っても同じことが実現できますが、QSPを使えばコードの開発が不要です。また、依存関係を作成することで、他のリソースで保護しているアプリケーションと連携してサービスを起動・停止させることができます。

ただし、QSPのquickCheckでは簡易なチェックしか行っていません(serviceコマンドのstatusを利用していません)。実際にそのサービスが提供できているか、プロセスが動作しているかは保証されません。複雑な起動や停止処理、堅牢なチェックが必要な場合は、Generic Applicationの利用を検討してください。

詳細は以下のURLをご参照ください。

[Quick Service Protection \(QSP\) Recovery Kit](#)

LifeKeeper API for Monitoring

LifeKeeper API for Monitoringは、稼働中のLifeKeeper!に対して問い合わせを行うことで、LifeKeeperノードの稼働状況や保護しているリソースの状況を取得できます。

本APIはlighttpd上でCGIとして動作し、lcdstatusコマンドで取得できる情報を、API経由で取得できるようにしたものです。本APIで取得できる情報は以下のとおりです。

- LifeKeeperノードの死活
- コミュニケーションパスの死活
- リソースの保護状況

詳細は以下のURLをご参照ください。

[LifeKeeper API for Monitoring](#)

Watchdog

Watchdog は、サーバが正常に動作しない場合に、問題の発生を予防する修正処置 (リブート) を確実に実行できるようにサーバを監視する方法です。Watchdog は、特別な Watchdog ハードウェアを使用して実装する場合と、ソフトウェアのみのオプションを使用して実装する場合があります。

(注記: この構成は、Red Hat Enterprise Linux Versions 6 および 7 でのみ検証されています。他のオペレーティングシステムでは検証されていないため、現時点ではサポートされません。)

コンポーネント

- Watchdog timer - ソフトウェアドライバまたは外部ハードウェアコンポーネント
- Watchdog daemon - 該当する Linux ディストリビューションを通じて rpm が入手可能

設定

- LifeKeeper Core daemon - LifeKeeper のインストールに付随
- health check script - LifeKeeper SSP core の動作状況を確認するスクリプト



LifeKeeper と Watchdog の相互運用性

次のセクションを注意深く読んでください。デーモンは、エラーからリカバリするように設計されており、注意深く設定しないとデーモンはシステムをリセットします。インストールおよび設定を行う前に慎重に計画してください。このセクションの目的は、Watchdog についての説明や設定をすることではありません。ここでは、Watchdog 構成での LifeKeeper SSP との相互運用性についての説明や設定のみ行います。

設定

以下の手順は、root ユーザ権限を持つ管理者が行う必要があります。管理者は、Watchdog のリスクおよび問題についてすでに熟知しているものとします。

ヘルスチェックスクリプト (LifeKeeper 監視スクリプト) は、LifeKeeper の設定と Watchdog の設定 (/opt/LifeKeeper/samples/watchdog/LifeKeeper-watchdog) を関連付けるコンポーネントです。このスクリプトは、LifeKeeper コアコンポーネントの基本部分を監視できます。

1. 以前に Watchdog を設定していた場合は、次のコマンドを入力して Watchdog を停止します。そうでない場合は、手順 2 に進みます。

```
service watchdog stop (RHEL6)
systemctl stop watchdog (RHEL7)
```

2. Watchdog ソフトウェアのインストールで供給される Watchdog 設定ファイル (/etc/watchdog.conf) を編集します。
 - test-binary を次のように修正します。

```
test-binary = /opt/LifeKeeper/samples/watchdog/LifeKeeper-  
watchdog
```

- test-timeout を次のように修正します。

```
test-timeout = 5
```

- interval を次のように修正します。

```
interval = 7
```

interval は、test-timeout 以上の値であることが必要です。また、あまりに長い間隔にすると障害検出が遅れてしまうので、5~10程度を推奨します。

3. LifeKeeper SSP が起動していることを確認します。まだの場合は、[LifeKeeper の起動](#)トピックを参照してください。
4. 次のコマンドを入力して Watchdog を起動します。

```
service watchdog start (RHEL6)  
systemctl start watchdog (RHEL7)
```

5. 今後の再起動の際に Watchdog を自動的に起動させるには、次のコマンドを入力します。

```
chkconfig --levels 35 watchdog on (RHEL6)  
systemctl enable watchdog (RHEL7)
```

注記: Watchdog を設定すると、予想外のリポートがときどき発生する可能性があります。これは、Watchdog の仕組みから来る一般的な性質です。正常にตอบสนองしないプロセスがあると、Watchdog 機能は LifeKeeper (またはオペレーティングシステム) がハングしていると判断し、(警告なしに) システムをリポートします。

アンインストール

LifeKeeper をアンインストールする場合は、慎重に行ってください。以下に列記の通り、上記の手順を逆の順で実行します。

警告: LifeKeeper を構成する RPM パッケージを削除する方法で LifeKeeper をアンインストールする場合は、先に **Watchdog を停止してください**。上記の手順 2 では、LifeKeeper の Watchdog スクリプトを呼び出すように Watchdog 設定ファイルを修正しています。したがって、先に Watchdog を停止しておかないと、存在しないスクリプトを呼び出すこととなります。リポートを実行するこのスクリプトが見つからない場合は、エラーが発生します。この状態は Watchdog を停止するまで続きます。

1. 次のコマンドを入力して Watchdog を停止します。

```
service watchdog stop (RHEL6)  
systemctl stop watchdog (RHEL7)
```

2. Watchdog ソフトウェアのインストールで供給される Watchdog 設定ファイル (/etc/watchdog.conf) を編集します。

- test-binary および interval の両エントリをコメントアウトします (各行の先頭に # を追加します)。

```
#test-binary =  
#interval =
```

アンインストール

(注記: interval が他の機能によって以前から使用されていた場合は、そのままにしておくこともできます)

3. LifeKeeper をアンインストールします。[LifeKeeper の削除](#)トピックを参照してください。
4. これで Watchdog を起動し直すことができます。LifeKeeper のみが Watchdog を使用していた場合は、次のコマンドを入力すると Watchdog を永続的に無効にできます。

```
chkconfig --levels 35 watchdog off (RHEL6)
systemctl disable watchdog (RHEL7)
```

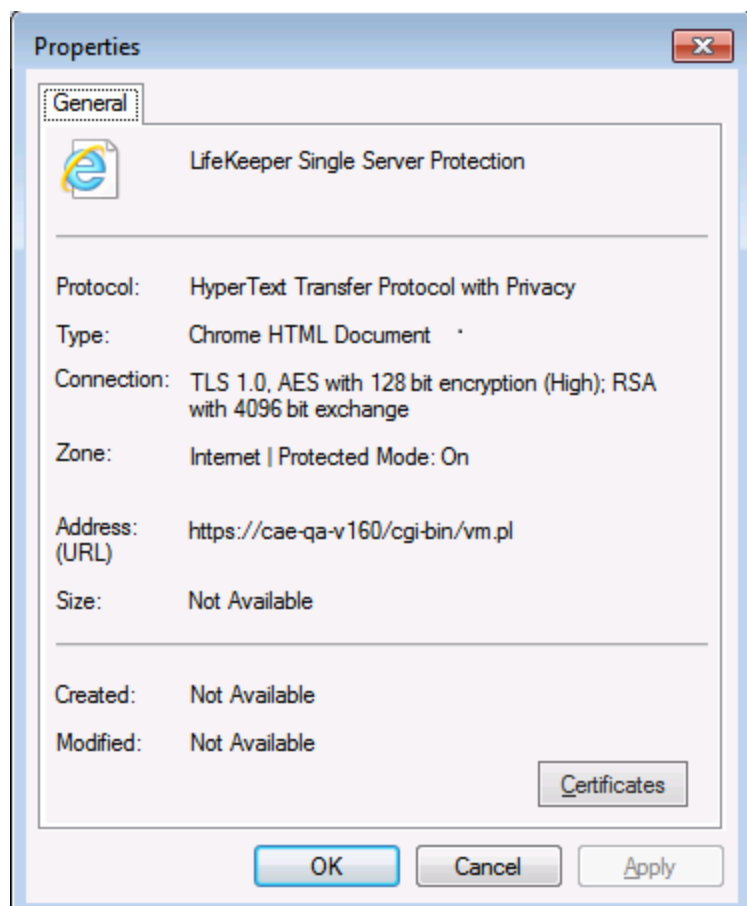
SMC

質問

(プラグインから) 使用している SMC を調べる方法 ありますか。

回答

右クリックして、プラグイン Web ページの **[Properties]** を表示します。



回答

トラブルシューティング

このセクションには、LifeKeeper Single Server Protection の制限または既知の問題と、SMC のトラブルシューティングのヒントが記載されています。

トラブルシューティング情報の詳細については、の LifeKeeper テクニカルノートおよびトラブルシューティングの各トピックを参照してください。

既知の問題と回避策

下記に、LifeKeeper Single Server Protection で明らかになっている制限または既知の問題を示します。

Core

バグ 2257

LifeKeeper Single Server Protection および SIOS Protection Suite のノードに

credstore 経由でアクセスするときに、正しい credstore キーが必要です

解決方法: `credstore` を使用して、LifeKeeper Single Server Protection または SIOS Protection Suite のノードの認証情報を保存するときに、`credstore` の認証情報キーについてホスト名の正しい形式 (`credstore -k <hostname>`) を使用する必要があります。

LifeKeeper Single Server Protection プラグインの場合、LifeKeeper Single Server Protection プラグイン画面の **[Hostname:]** フィールドに表示されるシステムのホスト名を使用して `credstore` を実行する必要があります。

SIOS Protection Suite の場合、認証情報の保存に使用するホスト名は、コマンドラインツール (`lkpolicy` など) の `-d` 引数に使用するものと同じである必要があります。例えば、`lkpolicy -d mynode1` を実行する場合、`credstore -k mynode1` を使用して認証情報を保存する必要があります。この場合、認証情報の保存に FQDN を使用することはできません。FQDN を使用する場合は、`lkpolicy -d FQDN` を実行する必要があります。

対応策: LifeKeeper Single Server Protection または SIOS Protection Suite のすべてのノードで機能するデフォルトの認証情報セット (`credstore -k default`) を保存した場合、この問題の影響を受けることはありません。

バグ 2408**HA ハートビートが不正に有効になります**

2番目のリソースに障害が発生した後、lkmhadがHAハートビートを不正に有効にします。

対応策: `/etc/default/LifeKeeper` の `LKCHECKINTERVAL` に、VMware HA の [VM Monitoring Failure Interval] (VM の障害監視間隔) よりも大きい値を設定してください。**注記:** `LKCHECKINTERVAL` のデフォルト値は 120 秒です。また、これは、VMware HA の VM 監視の監視感度「low」のデフォルト値でもあります。

openssl-develがインストールされていない場合 SMCをインストールできません。

v8.3.2のSMCをインストールする際には、あらかじめopenssl-develがインストールされている必要があります。インストールしていない場合、以下のようなメッセージを出力してSMCのインストールに失敗します。

```
ld -shared -o ./lib/Crypt-SSLeay-0.55-0.9.8/lib/auto/Crypt/SSLeay/SSLeay.so
./lib/Crypt-SSLeay-0.55-0.9.8/lib/auto/Crypt/SSLeay/SSLeay.o -lcrypto -lsslld: cannot find -lcrypto
```

Unable to link the Crypt::SSLeay Perl module. Secured connections will be unavailable until you install the Crypt::SSLeay module.

So required libcrypto.a in system library.

setupスクリプトを実行した際に、上記のようなメッセージが出力された場合、OSに同梱されているopenssl-develをインストールしてから、再度 setupスクリプトを実行してください。

GUI**LifeKeeper Single Server Protection GUI の更新の問題**

GUI のリソースツリーが不規則に表示されることがあります (リソースの依存関係が正しく表示されない)。

対応策: GUI の更新を実行してください。

Apache

Apache リソースの作成に失敗する

エラーメッセージの例：

Error: valid_http_root: Since "/usr/sbin/httpd" is shareable on "/usr", "/etc/httpd" must be also

原因：

不具合のため、マウントポイント"/(root)にあるファイルを正しく検索できません。

例えば、マウントポイント"/と同じファイルシステムに/etc/httpdがある場合、リソースの作成に失敗します。

対応策：

次のいずれかのようにマウントすることにより、エラーを回避することができます。

(a) /etc/httpdなどを別のマウントポイント以下に移動する

(b) /etcを/dev/sdb1などにマウントする

Oracle

バグ 2387

LifeKeeper Single Server Protection 環境の root ファイルシステムに、Oracle 階層を作成できません。

対応策: 以下の手順に従って、Oracle を新しいファイルシステムにコピーしてください。

Oracle データを格納できる十分に大きい新しいディスク (例: /dev/sdb) を作成してください。(注記: ディスクの大きさを見積もるために、/oracle ディレクトリの大きさを参考にできます。ログを含めるために、50 % 以上増加してください)。

fdisk を使用して、そのディスクに新しいパーティションを作成してください。

```
fdisk /dev/sdb
```

ファイルシステムを作成してください。

```
mkfs -t ext3 /dev/sdb1
```

このファイルシステムをマウントしてください (この例では /mnt/oracle を使用)。

```
mkdir /mnt/oracle
```

```
mount /dev/sdb1 /mnt/oracle
```

Oracle と Listener を停止してください。

Oracle を新しいファイルシステムにコピーしてください。

```
cd /oracle
```

```
cp -a * /mnt/oracle
```

(注記: データ量により、この手順には時間がかかることがあります)

新しいファイルシステムをアンマウントしてください。

```
umount /mnt/oracle
```

新しいファイルシステムを /oracle にマウントしてください。

```
mount /dev/sdb1 /oracle
```

Listener を開始し、次に Oracle を開始してください。

Oracle Recovery Kitは、AWS EC2上のOracle Database Standard Edition 2 (SE2)をサポートしません。

AWS EC2上のシステムにおいてOracle Database Standard Edition 2 (SE2)のテストを行った際に、幾つかの奇妙な振る舞いが確認されました。しかしながら、EC2以外のシステムにおいては正常動作が確認できておりますので、EC2以外のシステムにおいてAWS EC2上のOracle Database Standard Edition 2 (SE2)の利用をサポートします。

SAP

バグ 2388

SAP の場合、GUI を使用して階層を作成することはできません。

対応策: コマンドラインオプションを使用して、階層を作成してください。ただし、以下に示すように、コマンドラインの最後に番号 76 を指定してください。

```
$LKROOT/lkadm/subsys/appsuite/sap/bin/create <primary sys> <tag> <SAP SID>  
<SAP Instance> <switchback type> <IP Tag> <Protection Level> <Recovery  
Level> <Additional SAP Dependents> 76
```

コマンドラインの詳細については、「コマンドラインによる SAP の設定」を参照してください。

SIOS Protection Suite for Linuxにおける「[既知の問題と制限](#)」も参照ください。

SMC のトラブルシューティング

以下に、トラブルシューティングに関するヒントを示します。

LifeKeeper Single Server Protection が監視するゲストの仮想マシンには、VMware Tools がインストール済みである必要があります。

LifeKeeper Single Server Protection は、VMware Tools が有効にインストールされていない仮想マシンに接続できません。SteelEye 管理コンソールはこれらのマシンに接続できないので、マシンとそのリソースの完全なステータスを取得できません。vSphere Client 内の LifeKeeper Single Server Protection プラグインは、これらのゲスト (ツールがインストールされていない場合) に関するエラーメッセージを表示します。

解決方法: LifeKeeper Single Server Protection が保護するゲストマシンには、必ず VMware Tools をインストールしてください。

